

週刊「波動展望の部屋」 金融FX版

3月7日号

サイクル・パターン分析を中心としたテクニカル分析。今、考えるべき展開とリスク、チャートポイントを解説。
作成日時： 2011年3月4日 17:00

発行・販売： 北辰物産株式会社
波動展望編集局・編集長 山本 毅
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町1-9-2
Tel 03-3668-9141 <http://info.hd-station.net>

購読料

CX版	3ヶ月 12,000円	6ヶ月 20,000円
金融FX版	3ヶ月 12,000円	6ヶ月 20,000円
総合版：	3ヶ月 12,900円	6ヶ月 22,000円

このレポートは将来の見通しの適確性、あるいは収益性を保証するものではありません。各トレーダー及びレポートの読者は自己責任で取引してください。このレポートの筆者も発行人も金融、あるいは商品市場における各参加者の決断については一切責任を負いません。先物、あるいはオプション取引は高リスクを伴うと考えられています。

週刊「波動展望の部屋」 金融FX 3月7日号 目次

ドル円 360分足 当面の目処と判断基準
ドル円 日足分析 煮え切らない状況のまま
ユーロドル 日足分析 想定関門を突破、RCIの26日線三段上げ型
ユーロドル 360分足 5週から6週のリズム
ユーロ円 日足分析 1月底軸に左右対称的戻りか？
ドル指数 週足分析 手前の43週サイクル底割れの危機
豪ドル米ドル 日足分析 三角持合の決着未だ
豪ドル円 日足分析 2月高値抜けるかどうか両極端の分かれ目
NZドル 週足分析 対等数値からの重要な支持線割れ
LIBOR市場動向 ユーロ・ドル金利差さらに拡大
10年債利回りスプレッドの推移 独・米、米・日
10年債利回りスプレッドの推移 豪・日、豪・米
PIGSの10年債動向 イタリアで急落、要注意状況に
NYダウ 日足分析 中々上昇チャンネルから転落しない、転落 = 奈落、回避 = 5月天井？
日経平均 日足分析 チャンネルから落ちなかった、ならば
サウジ、クウェート、ドバイの株暴落について

ドル円 360分足 当面の目処と判断基準

USD/JPY(BID) 360分足 期間10/10/26~11/03/04(372)高84.48(10/12/16 04:41:09)安80.22(10/11/01 06:32:49)

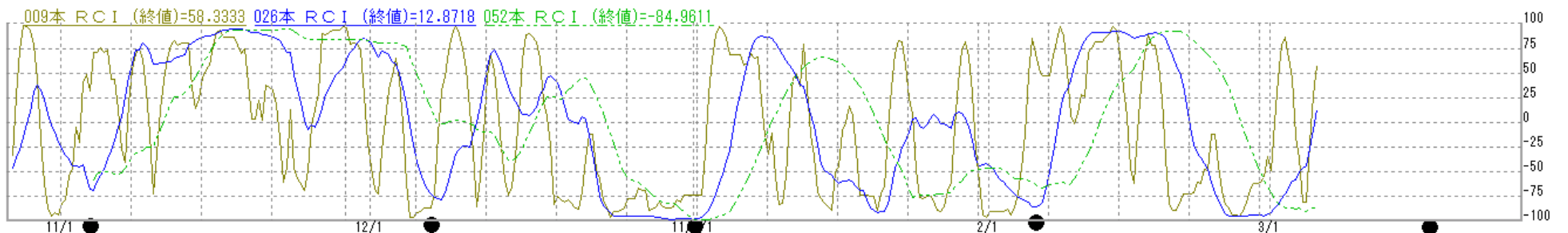
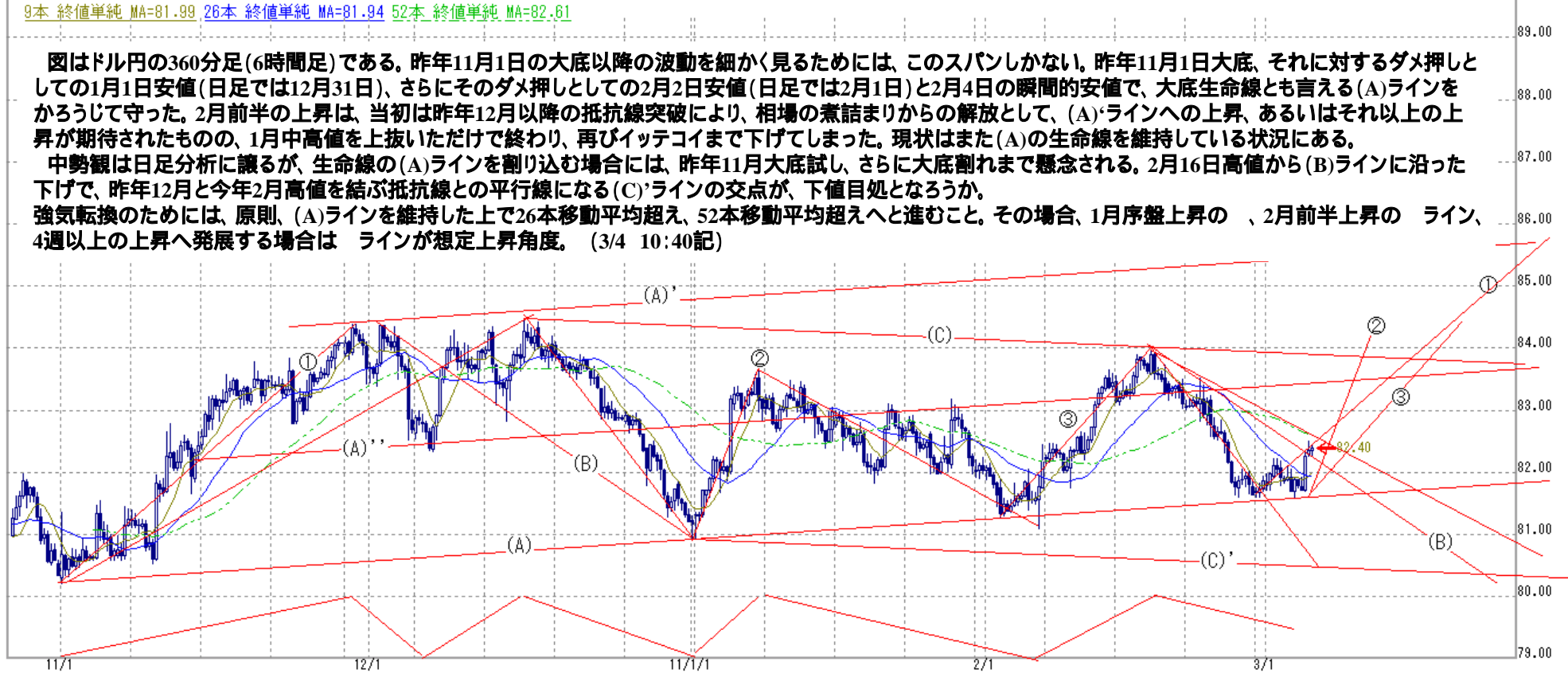
11/03/04 始82.36 高82.45 安82.28 終82.40

9本 終値単純 MA=81.99 26本 終値単純 MA=81.94 52本 終値単純 MA=82.61

図はドル円の360分足(6時間足)である。昨年11月1日の大底以降の波動を細かく見るためには、このスパンしかない。昨年11月1日大底、それに対するダメ押しとしての1月1日安値(日足では12月31日)、さらにそのダメ押しとしての2月2日安値(日足では2月1日)と2月4日の瞬間的安値で、大底生命線とも言える(A)ラインをかるうじて守った。2月前半の上昇は、当初は昨年12月以降の抵抗線突破により、相場の煮詰まりからの解放として、(A)ラインへの上昇、あるいはそれ以上の上昇が期待されたものの、1月中高値を上抜いただけで終わり、再びイッテコイまで下げてしまった。現状はまた(A)の生命線を維持している状況にある。

中勢観は日足分析に譲るが、生命線の(A)ラインを割り込む場合には、昨年11月大底試し、さらに大底割れまで懸念される。2月16日高値から(B)ラインに沿った下げて、昨年12月と今年2月高値を結ぶ抵抗線との平行線になる(C)'ラインの交点が、下値目処となるうが、

強気転換のためには、原則、(A)ラインを維持した上で26本移動平均超え、52本移動平均超えへと進むこと。その場合、1月序盤上昇の、2月前半上昇のライン、4週以上の上昇へ発展する場合は、(A)ラインが想定上昇角度。(3/4 10:40記)



ドル円 日足分析 煮え切らない状況のまま

USD/JPY(BID) 日足 期間09/09/16~11/03/04(383)高94.97(10/05/04)安80.22(10/11/01)

11/03/04 始82.36 高82.45 安82.28 終82.37

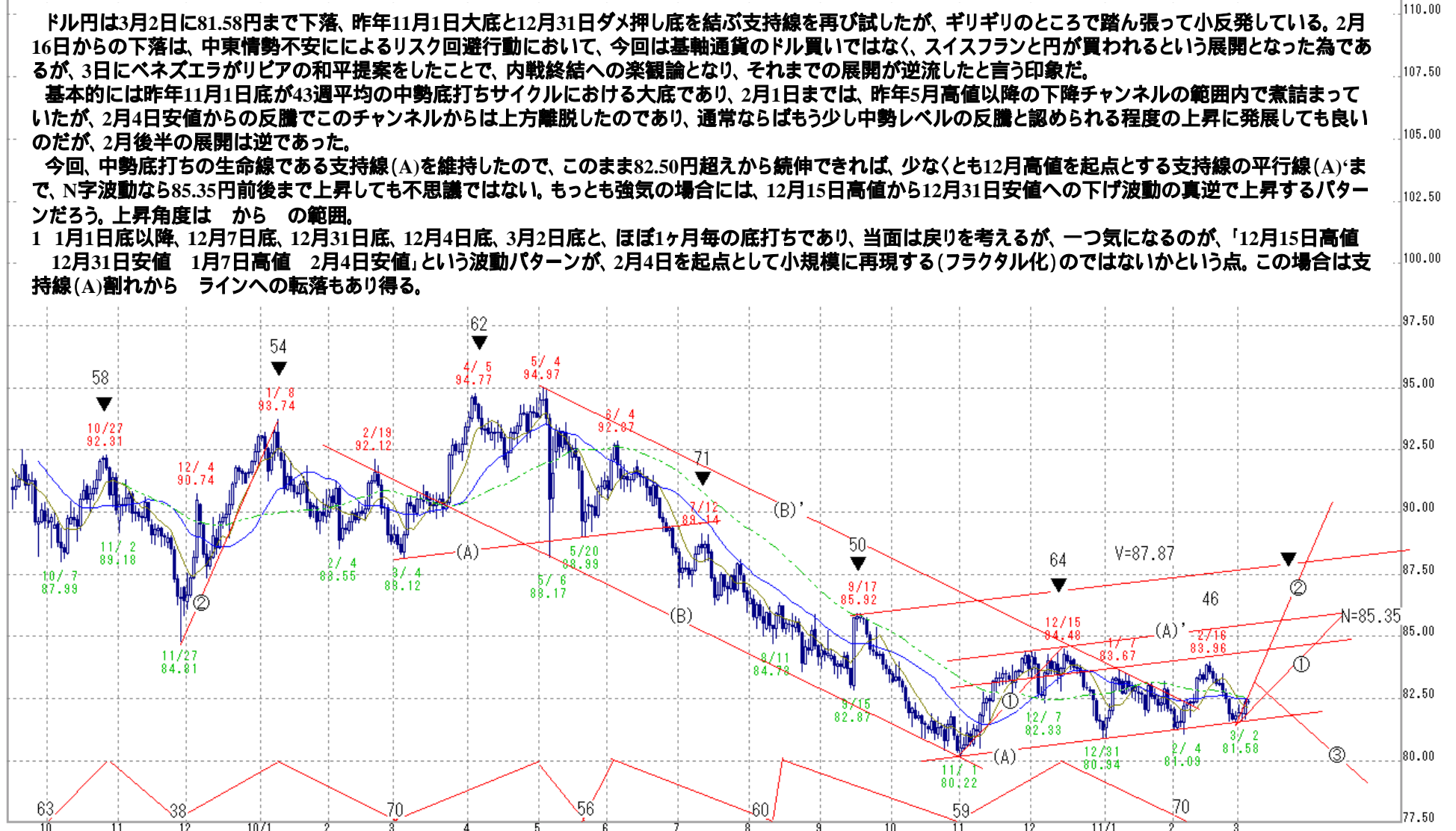
9日 終値単純 MA=82.14 26日 終値単純 MA=82.47 52日 終値単純 MA=82.52

ドル円は3月2日に81.58円まで下落、昨年11月1日大底と12月31日ダメ押し底を結ぶ支持線を再び試したが、ギリギリのところ踏ん張って小反発している。2月16日からの下落は、中東情勢不安によるリスク回避行動において、今回は基軸通貨のドル買いではなく、スイスフランと円が買われるという展開となった為であるが、3日にベネズエラがリビアの和平提案をしたことで、内戦終結への楽観論となり、それまでの展開が逆流したと言う印象だ。

基本的には昨年11月1日底が43週平均の中勢底打ちサイクルにおける大底であり、2月1日までは、昨年5月高値以降の下降チャンネルの範囲内で煮詰まっていたが、2月4日安値からの反騰でこのチャンネルからは上方離脱したのであり、通常ならばもう少し中勢レベルの反騰と認められる程度の上昇に発展しても良いのだが、2月後半の展開は逆であった。

今回、中勢底打ちの生命線である支持線(A)を維持したので、このまま82.50円を超えれば、少なくとも12月高値を起点とする支持線の平行線(A)'まで、N字波動なら85.35円前後まで上昇しても不思議ではない。もっとも強気の場合には、12月15日高値から12月31日安値への下げ波動の真逆で上昇するパターンだろう。上昇角度は からの範囲。

1 1月1日底以降、12月7日底、12月31日底、12月4日底、3月2日底と、ほぼ1ヶ月毎の底打ちであり、当面は戻りを考えるが、一つ気になるのが、「12月15日高値 12月31日安値 1月7日高値 2月4日安値」という波動パターンが、2月4日を起点として小規模に再現する(フラクタル化)のではないかという点。この場合は支持線(A)割れから ラインへの転落もあり得る。



ユーロドル 360分足 5週から6週のリズム

EUR/USD (BID) 360分足 期間10/10/15~11/03/04(400)高1.4282(10/11/04 22:56:21)安1.2872(11/01/10 06:10:00)

11/03/04 始1.3959 高1.3970 安1.3949 終1.3954

9本 終値単純 MA=1.3868 26本 終値単純 MA=1.3816 52本 終値単純 MA=1.3713

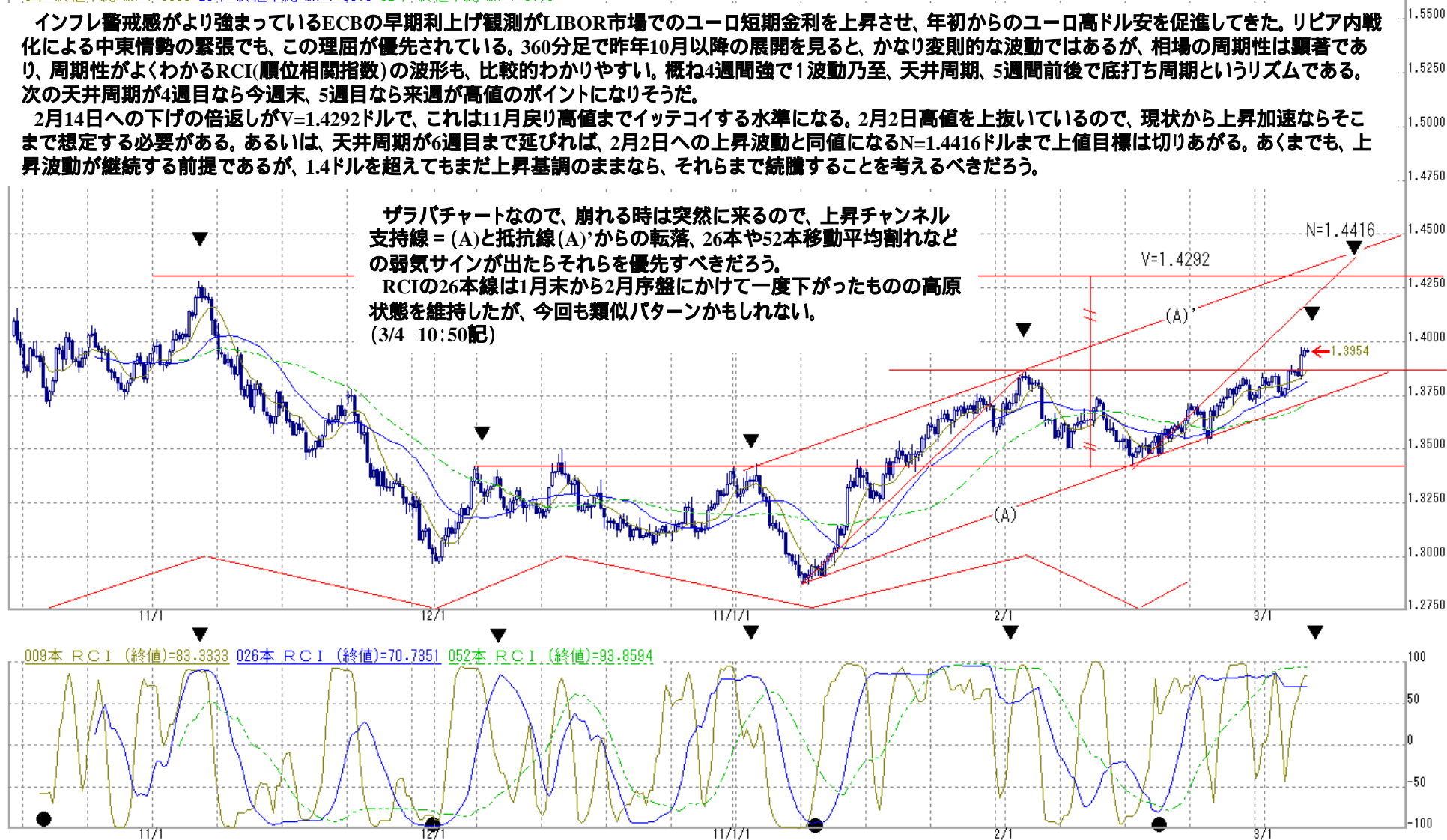
インフレ警戒感がより強まっているECBの早期利上げ観測がLIBOR市場でのユーロ短期金利を上昇させ、年初からのユーロ高ドル安を促進してきた。リビア内戦化による中東情勢の緊張でも、この理屈が優先されている。360分足で昨年10月以降の展開を見ると、かなり変則的な波動ではあるが、相場の周期性は顕著であり、周期性がよくわかるRCI(順位相関指数)の波形も、比較的わかりやすい。概ね4週間強で1波動乃至、天井周期、5週間前後で底打ち周期というリズムである。次の天井周期が4週目なら今週末、5週目なら来週が高値のポイントになりそうだ。

2月14日への下げの倍返しはV=1.4292ドルで、これは11月戻り高値までイッテコイする水準になる。2月2日高値を上抜いているので、現状から上昇加速ならそこまで想定する必要がある。あるいは、天井周期が6週目まで延びれば、2月2日への上昇波動と同値になるN=1.4416ドルまで上値目標は切りあがる。あくまでも、上昇波動が継続する前提であるが、1.4ドルを超えてもまだ上昇基調のままなら、それらまで統騰することを考えるべきだろう。

ザラバチャートなので、崩れる時は突然に来るので、上昇チャンネル支持線=(A)と抵抗線(A)'からの転落、26本や52本移動平均割れなどの弱気サインが出たらそれらを優先すべきだろう。

RCIの26本線は1月末から2月序盤にかけて一度下がったものの高原状態を維持したが、今回も類似パターンかもしれない。

(3/4 10:50記)



ユーロ円 日足分析 1月底軸に左右対称的戻りか？

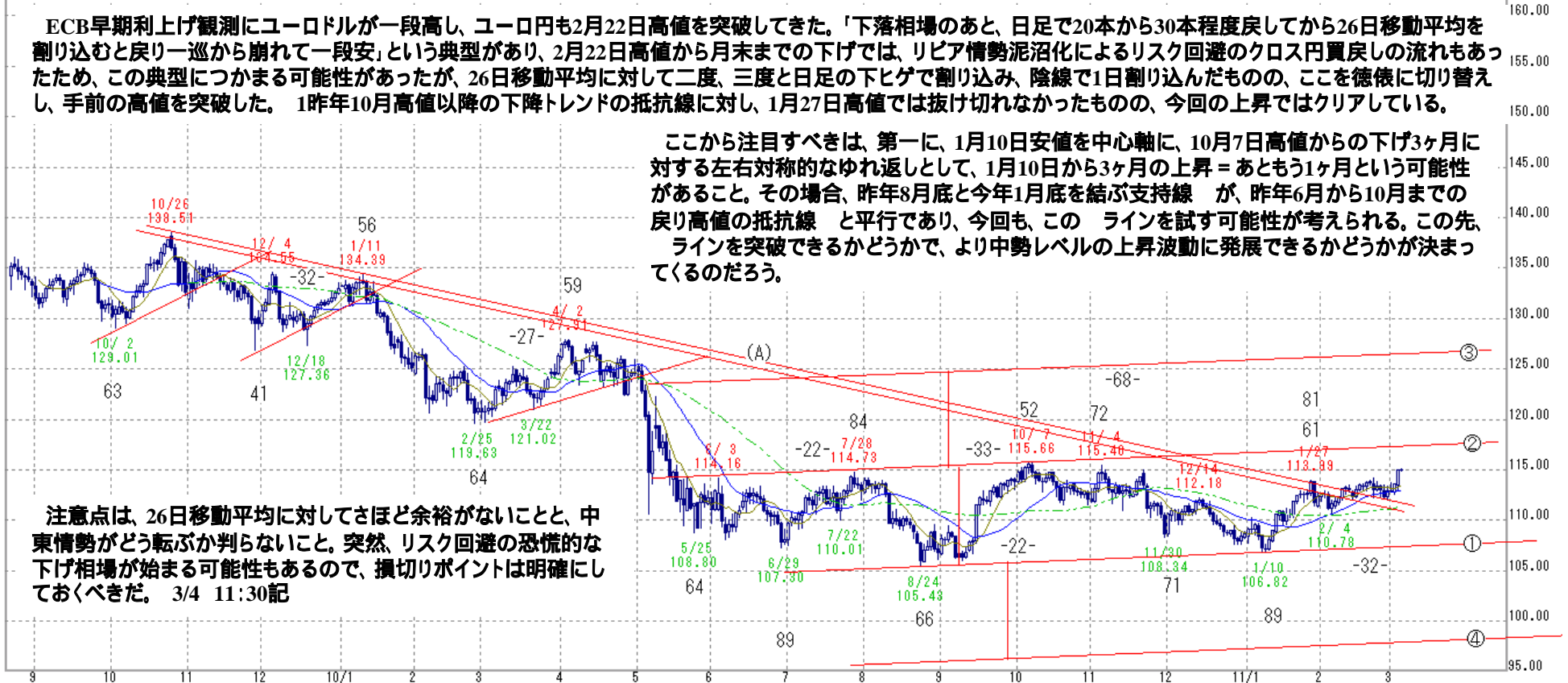
EUR/JPY(BID) 日足 期間09/08/21~11/03/04(400)高138.51(09/10/26)安105.43(10/08/24)

11/03/04 始114.96 高115.16 安114.86 終114.95

9日 終値単純 MA=113.45 26日 終値単純 MA=112.94 52日 終値単純 MA=111.40

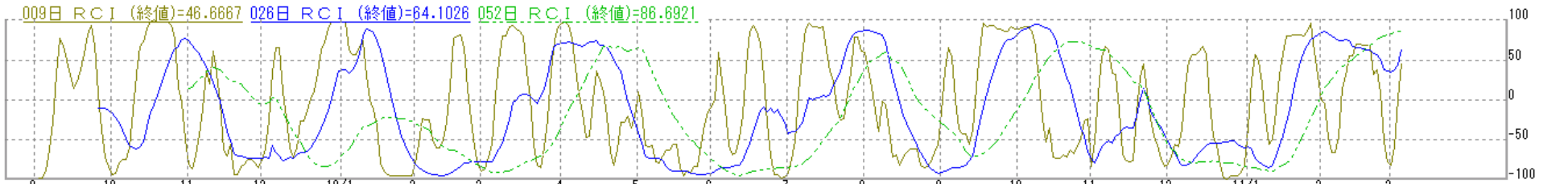
ECB早期利上げ観測にユーロドルが一段高し、ユーロ円も2月22日高値を突破してきた。「下落相場のと、日足で20本から30本程度戻してから26日移動平均を割り込むと戻り一巡から崩れて一段安」という典型があり、2月22日高値から月末までの下げでは、リビア情勢泥沼化によるリスク回避のクロス円買戻しの流れもあったため、この典型につかまる可能性があったが、26日移動平均に対して二度、三度と日足の下ヒゲで割り込み、陰線で1日割り込んだものの、ここを徳俵に切り替えし、手前の高値を突破した。1昨年10月高値以降の下降トレンドの抵抗線に対し、1月27日高値では抜け切れなかったものの、今回の上昇ではクリアしている。

ここから注目すべきは、第一に、1月10日安値を中心軸に、10月7日高値からの下げ3ヶ月に対する左右対称的なゆれ返しとして、1月10日から3ヶ月の上昇 = あともう1ヶ月という可能性があること。その場合、昨年8月底と今年1月底を結ぶ支持線が、昨年6月から10月までの戻り高値の抵抗線と平行であり、今回も、このラインを試す可能性が考えられる。この先、ラインを突破できるかどうかで、より中勢レベルの上昇波動に発展できるかどうかが決まってくるのだろう。



注意点は、26日移動平均に対してさほど余裕がないことと、中東情勢がどう転ぶか判らないこと。突然、リスク回避の恐慌的な下げ相場が始まる可能性もあるので、損切りポイントは明確にしておくべきだ。3/4 11:30記

.009日 RCI (終値)=46.6667 026日 RCI (終値)=64.1026 052日 RCI (終値)=86.6921



ドル指数 週足分析 手前の43週サイクル底割れの危機

ドル指数 週足 期間04/01/12~11/03/03(372)高92.63(05/11/16)安71.15(08/03/17)

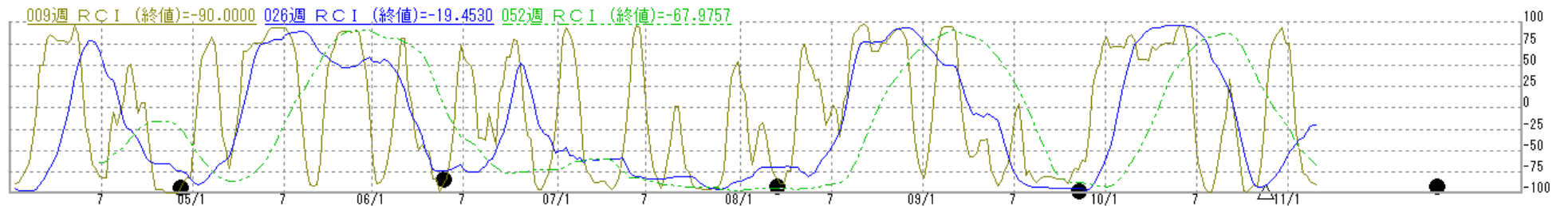
11/02/27 始77.29 高77.39 安76.39 終76.48

9週 終値単純 MA=78.25 26週 終値単純 MA=78.79 52週 終値単純 MA=81.01

ドル指数が下落している。まだ昨年11月4日底を割り込んでいないものの、ほとんど余裕がなくなってきている。Tボンド利回りが2月8日から下落していたが、それまでは昨年8月からの上昇基調が続いていたわけで、本来ならそれに連動してドル指数も上昇すべきところだったが、1月10日の段階で11月30日高値を抜かず、1月中はTボンド利回り上昇と真逆でドル指数は下げた。2月末からTボンド利回りは再び上昇しており、これにやや遅れてドル指数が上昇するならば、昨年11月底割れをギリギリで回避するかもしれないし、回避できれば強気なシナリオになるのだが、割ってしまえば元も子もなくなる。

ドル指数週足では、43週前後とその倍の86週前後の底打ちサイクルが認められる。昨年11月底は2009年11月底から50週目となり、43週サイクルの底と考えられる。これを割り込むと、次の43週サイクル底期となる今年夏から秋への下落局面と言うことになってくる。そういう意味では土俵際である。

リビア情勢によっても「有事のドル買い」は起こらなかった。既に基軸通貨としての存在価値が後退しているためとも言われている。ドルの価値自身が実は下がっているからそれを補うために長期債利回りが上昇せざるを得ない(長期債が売られている)ということならば、リーマンショックから2年経過の今年、QE2の限界が来れば、ドル暴落に発展しかねない。(3/4 11:50記)



NZドル 週足分析 対等数値からの重要な支持線割れ

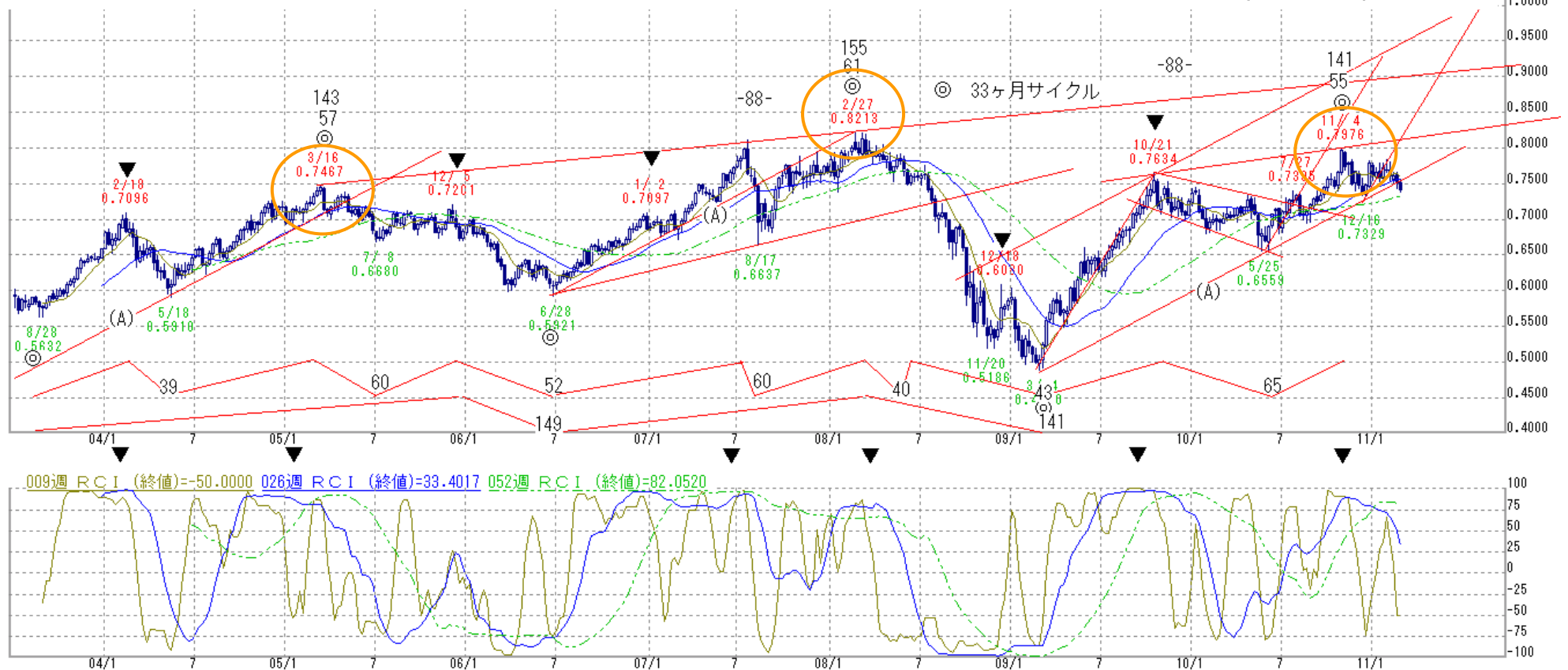
NZドル/米ドル 週足 期間03/07/07~11/03/03(400)高0.8213(08/02/27)安0.4890(09/03/04)

11/02/27 始0.7503 高0.7552 安0.7377 終0.7408

9週 終値単純 MA=0.7599 26週 終値単純 MA=0.7566 52週 終値単純 MA=0.7319

NZドル・米ドルは、11月4日高値が2008年2月天井から34ヶ月となり、33ヶ月前後の天井周期に捕まった可能性が懸念されるということを以前に書いたが、クライストチャーチの地震等、不幸な出来事も重なっていることではあるが、ここ2週の下げが厳しくなっており、33ヶ月天井サイクルからの調整が懸念される。

まず、2009年3月底と昨年5月底を結んだ支持線をこの2週の下げで割り込んだ。この支持線(A)は、2006年6月底から2008年2月天井までの上昇角度、2004年5月限底から2005年3月天井までの支持線とも同じ角度となる。1週割り込んで週週切り返せば逆に強いが、来週も陰線となると、週足の3本連続陰線 = 「三羽鳥」となり、状況は悪化する。昨年11月高値以降、陰線が多く、かつ、上ヒゲも含めてジリジリ下がって26週移動平均を割り込む状況は、2009年10月天井後、2008年2月天井後、2005年3月天井後に類似している印象だ。また、2009年3月底から昨年11月高値までの上昇はかぞえて88週だったが、2008年2月天井も、2006年6月底から88週目であった。RCIの26週線が年末から下落しているが、2009年3月底から大きく2つ目の山を作っているが、2008年2月天井も、2006年6月底からの二つ目の山から崩れた。強気転換には26週移動平均を上抜き返し、11月高値を突破すること。それができない内は、33ヶ月周期の天井からの崩れを警戒し続ける。(3/4 12/40記)



豪ドル米ドル 日足分析 三角持合の決着未だ

豪ドル/米ドル 日足 期間09/08/21~11/03/04(400)高1.0253(10/12/31)安0.8065(10/05/25)

11/03/04 始1.0143 高1.0147 安1.0111 終1.0133

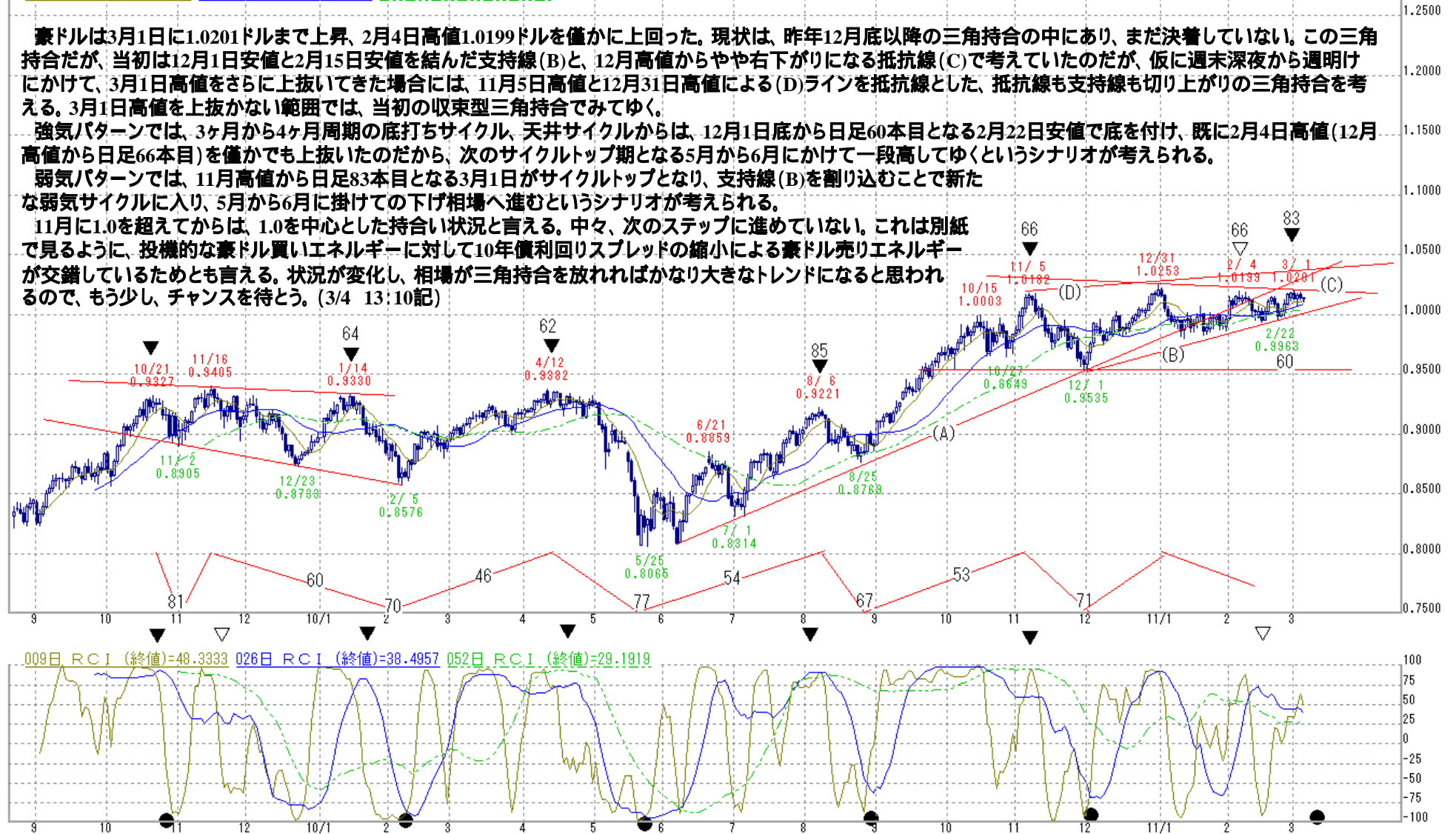
9日 終値単純 MA=1.0115 26日 終値単純 MA=1.0086 52日 終値単純 MA=1.0043

豪ドルは3月1日に1.0201ドルまで上昇、2月4日高値1.0199ドルを僅かに上回った。現状は、昨年12月底以降の三角持合の中にあり、まだ決着していない。この三角持合だが、当初は12月1日安値と2月15日安値を結んだ支持線(B)と、12月高値からやや右下がりになる抵抗線(C)で考えていたのだが、仮に週末深夜から週明けにかけて、3月1日高値をさらに上抜いてきた場合には、11月5日高値と12月31日高値による(D)ラインを抵抗線とした、抵抗線も支持線も切り上がりの三角持合を考える。3月1日高値を上抜かない範囲では、当初の収束型三角持合でみてゆく。

強気パターンでは、3ヶ月から4ヶ月周期の底打ちサイクル、天井サイクルからは、12月1日底から日足60本目となる2月22日安値で底を付け、既に2月4日高値(12月高値から日足66本目)を僅かでも上抜いたのだから、次のサイクルトップ期となる5月から6月にかけて一段高してゆくというシナリオが考えられる。

弱気パターンでは、11月高値から日足83本目となる3月1日がサイクルトップとなり、支持線(B)を割り込むことで新たな弱気サイクルに入り、5月から6月に掛けての下げ相場へ進むというシナリオが考えられる。

11月に1.0を超えてからは、1.0を中心とした持合い状況と言える。中々、次のステップに進めていない。これは別紙で見ると、投機的な豪ドル買いエネルギーに対して10年債利回りスプレッドの縮小による豪ドル売りエネルギーが交錯しているためとも言える。状況が変化し、相場が三角持合を放ればかなり大きなトレンドになると思われるので、もう少し、チャンスを待とう。(3/4 13:10記)



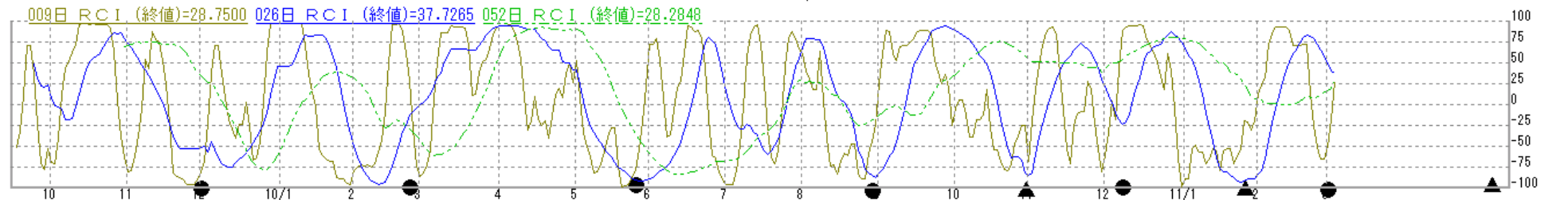
豪ドル円 日足分析 2月高値抜けるかどうか両極端の分かれ目

AUDJPY 日足 期間09/09/17~11/03/03(380)高88.07(10/04/30)安71.88(10/05/21)

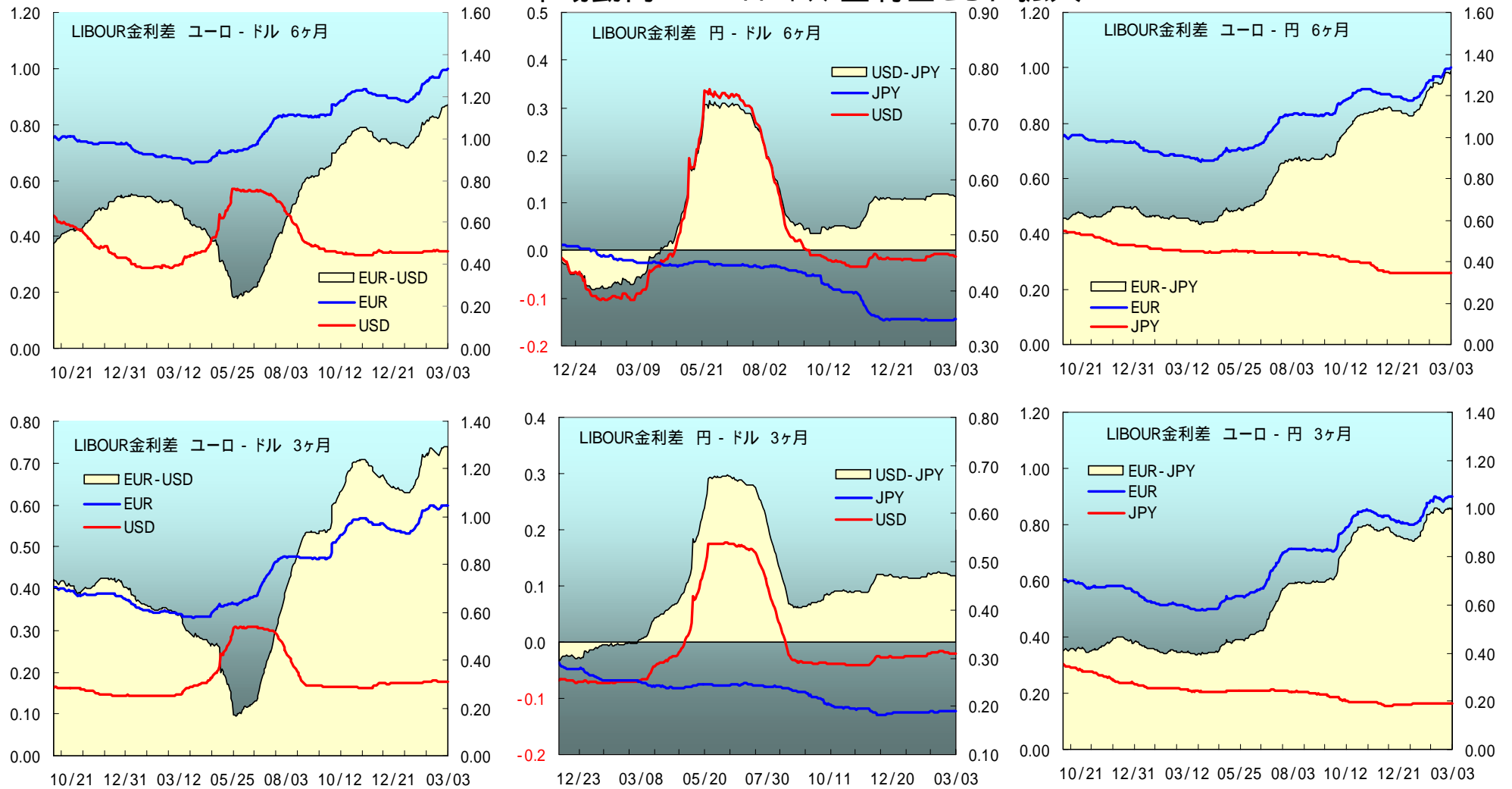
11/03/03 始83.22 高83.69 安82.94 終83.56

9日 終値単純 MA=83.09 26日 終値単純 MA=83.10 52日 終値単純 MA=82.85

豪ドル円は2月18日高値から24日安値まで下落したあとはやや戻している。3ヶ月から4ヶ月前後の底打ちサイクル、天井サイクルで見れば、2月18日高値が直近のサイクル天井であり、2月24日が、昨年12月1日底から日足62本目となり、ここで底となった可能性が考えられる。但し、相場の波形としてはかなり変則的であり、RCIの26日線騰落もズレている。RCIの26日線が十分の下げきらずにある中で相場が戻すというのは、12月1日底のあとの同26日線反転でも見られた。今回も、2月24日底打ちからやらずれて、12月初旬のように同26日線がゼロ手前から反転上昇して「二つの山」を形成するパターンかも知れない。もうひとつのサイクル的な見方としては、RCIの26日線がきっちり突っ込んで反転した1月31日安値を、サイクル底として見る方法であるが、いずれにしても、2月18日高値超えなら次のサイクルトップ期となる5月から6月にかけての上昇で、この場合は、昨年5月底以降の上昇チャンネルから上放れるので、大きな上昇トレンドを形成し、(A)''ライン=昨年5月までの抵抗線へ向かう可能性が出てくる。豪ドル米ドルが三角持合を上放れる場合に該当する。豪ドル米ドルが三角持合上放れに失敗し、豪ドル円も2月18日高値超えできずに失速する場合には、次の平均的サイクルボトム期となる5月から5月末にかけてが、チャンネル下限線(A)を試す弱気相場ということになるのだろう。(3/4 13:20記)

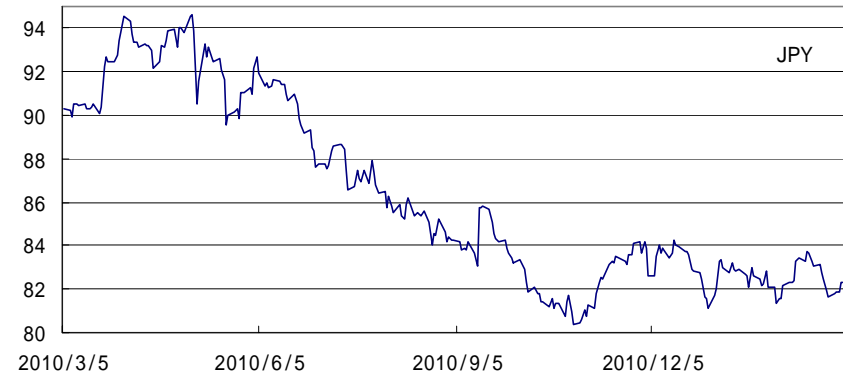
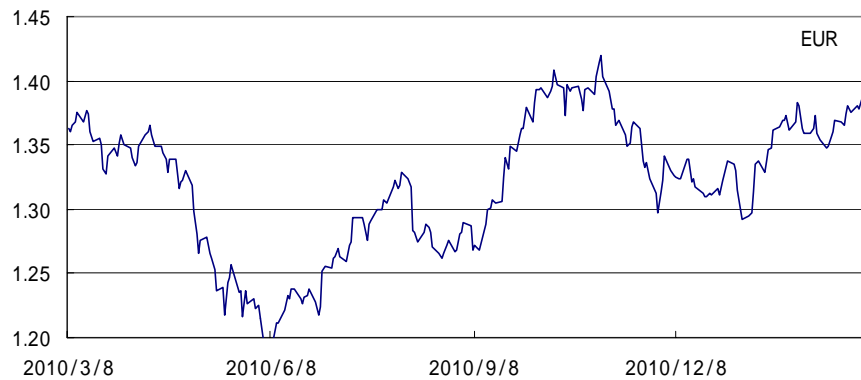
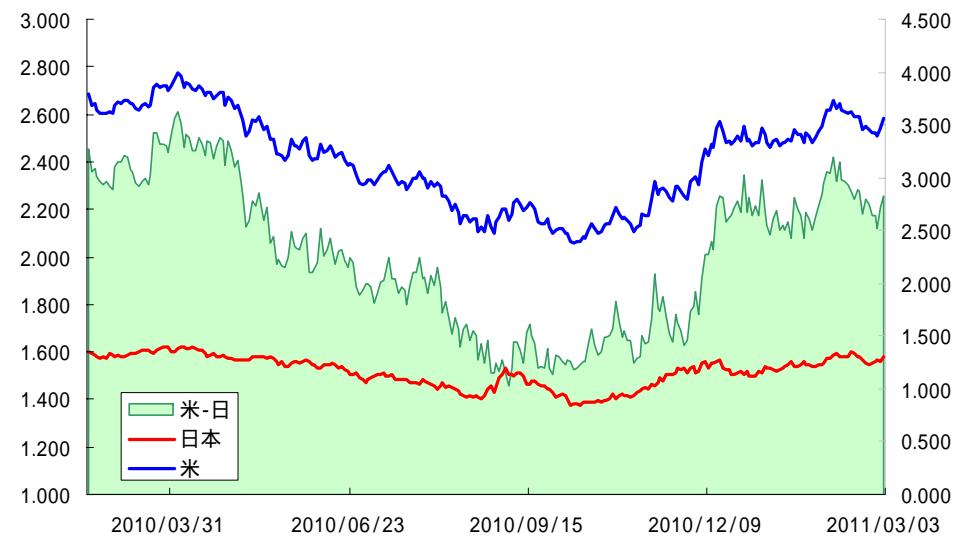
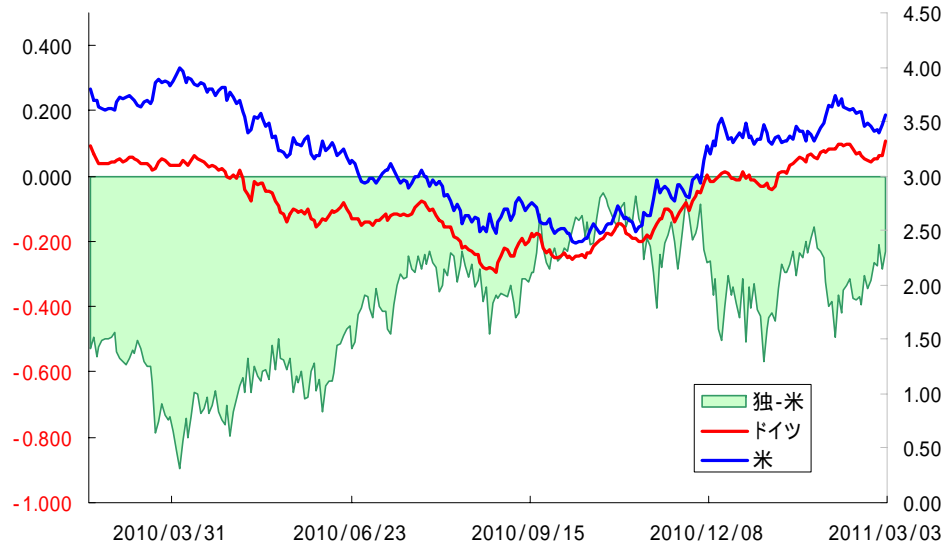


LIBOR市場動向 ユーロ・ドル金利差さらに拡大



ECBは3日、政策金利を予想通り1%に据え置いたが、トシエECB総裁は理事会後の会見で、来月にも利上げに踏み切る可能性を示唆した。市場はいずれ利上げに動くと思われていたが、4月の利上げは想定しておらず、サプライズでもあった。利上げを見込んでLIBOR市場でのユーロ金利6ヶ月物は1.3338%へ上昇、ユーロとドルのスプレッドは0.8723まで拡大し、この間の最高値となった。去年の6月からのユーロ高ドル安は、5月末からの同スプレッド拡大開始と連動しており、1年半ばかりの再拡大とユーロ反騰も連動している。もちろん、金利以外の要因(中東情勢)でユーロが崩れる可能性は常にあるし、EU重債務国の債券下落が要注意段階に来ていることもあり、金利が高いからユーロ高と一概には決め付けられないが、少なくとも市場はリビア問題よりもこちらを優先している。(3/4 10:00記)

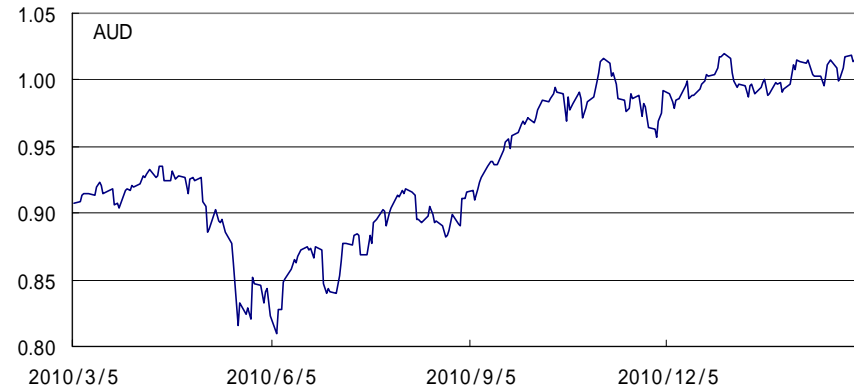
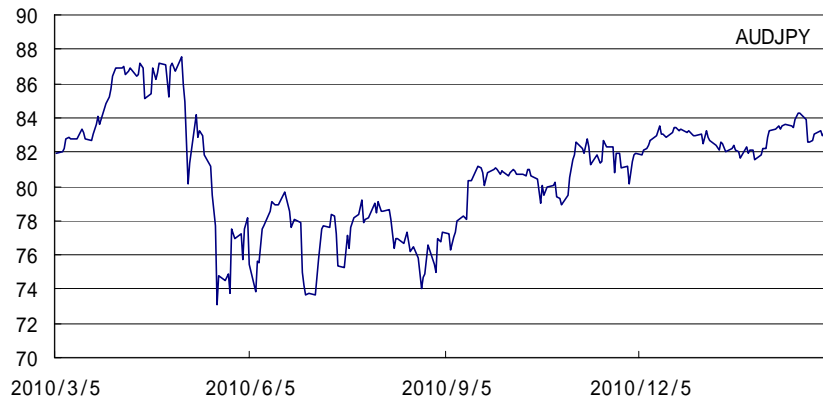
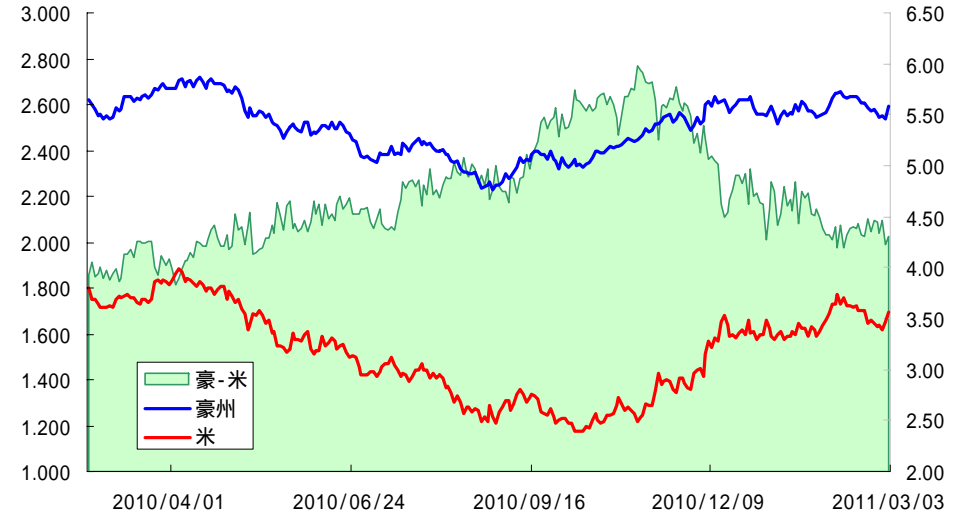
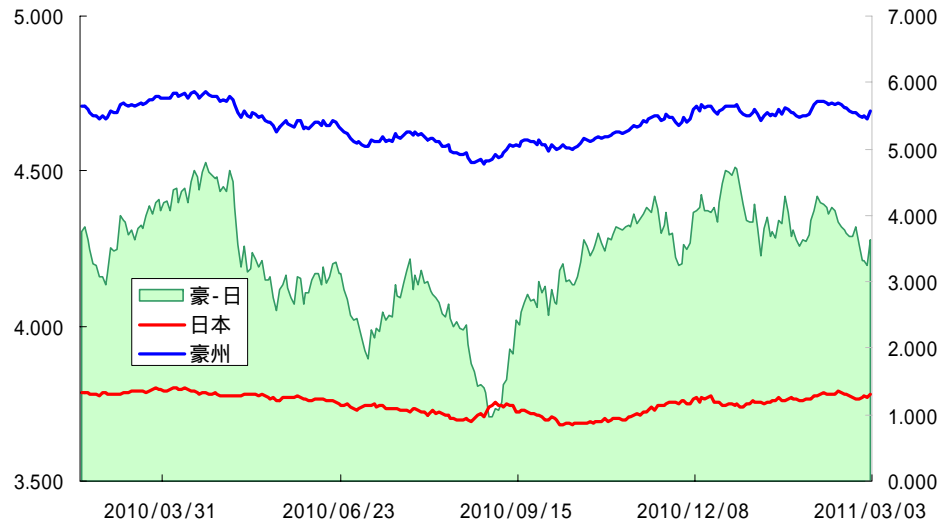
10年債利回りスプレッドの推移 独・米、米・日



今週はドイツも米国も日本の10年債利回りは上昇したが、ドイツと米国のスプレッドは3日段階で-0.231%まで縮小、2月8日に-0.491%まで拡大したところをボトムに縮小(上昇)傾向が続いている。短期金利市場でのECB早期利上げ観測によるユーロ金利上昇によるスプレッド拡大がユーロ買いドル売りにつながっているが、長期債利回りレベルでもドイツ債利回り上昇の加速度が増しており、ユーロ買いドル売り要因になっている。短期も長期も、金利面でのユーロ有利な状況が解消されないと、今のユーロチャカドル安基調が継続しやすいとは言えるのだろう。

日米のスプレッドは再び拡大。下げていた米10年債利回りが再上昇している中で、加速度は米が勝り、ドル円にとってはドル買い円売り要因になっている。ただ、2月初頭にかけてのスプレッド拡大局面ではドル円が余り反応しなかった事もあるので、過大な期待は持てない。(3/4 10:00記)

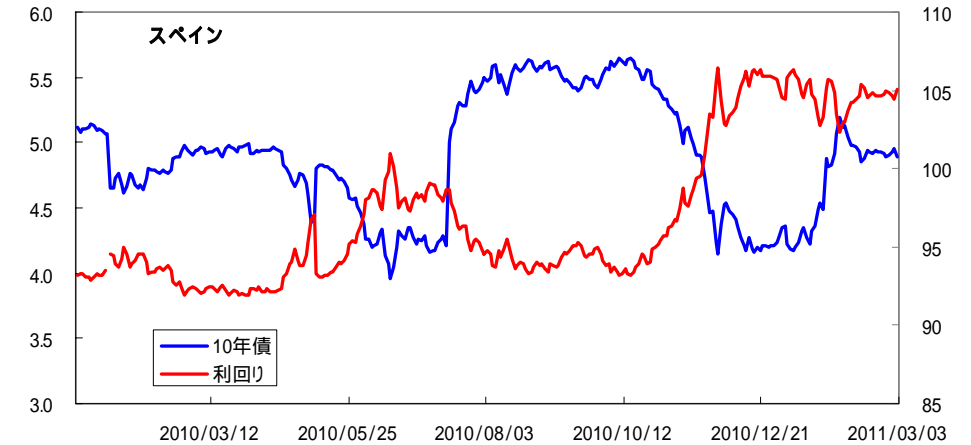
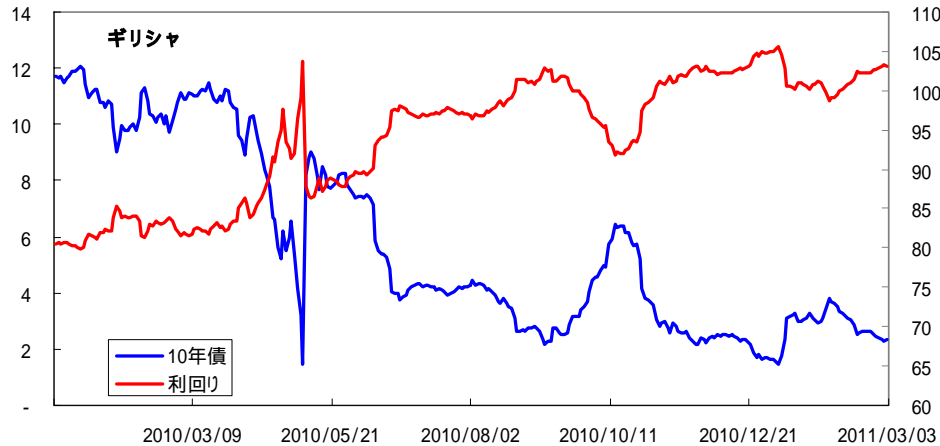
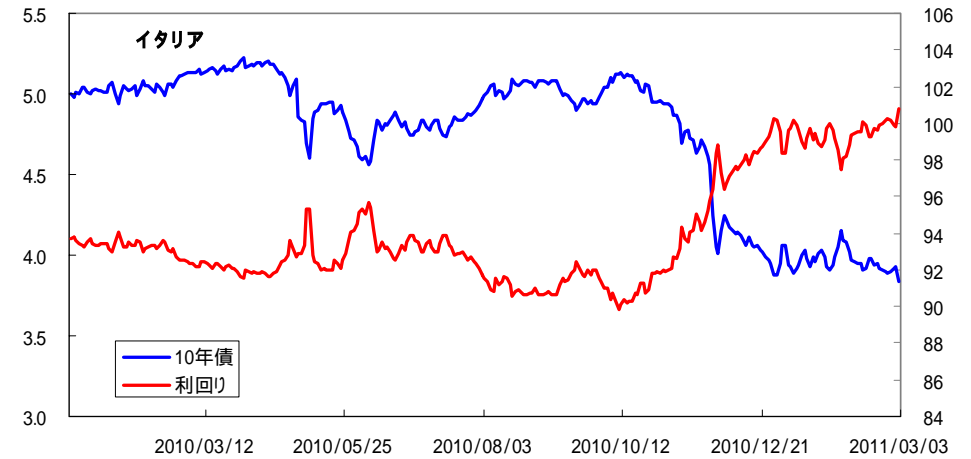
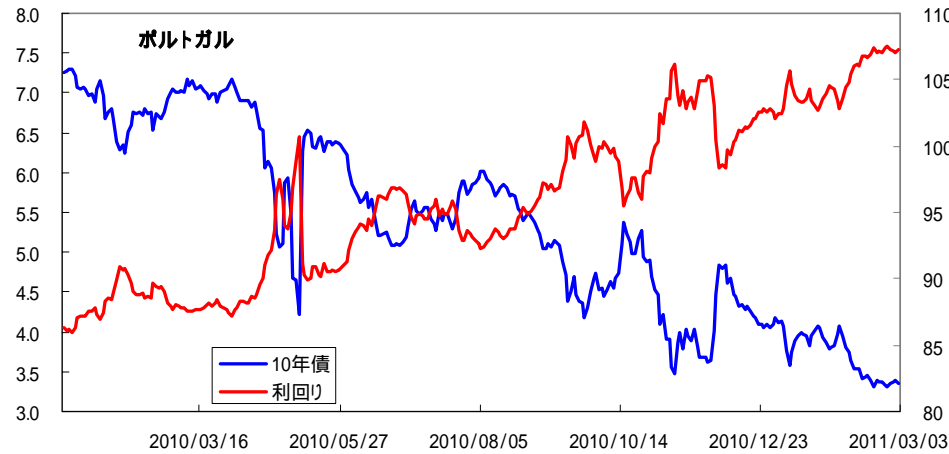
10年債利回りスプレッドの推移 豪・日・、豪・米



10年債利回り比較で見れば、昨年11月から、豪10年債利回りの上昇が停滞、逆に米10年債利回りが上昇加速となり、スプレッドは縮小し、長期金利面では豪ドル売り米ドル買いの状況になっている。しかし、それ以上に国際商品市場高やリスクテイクの投機心による豪ドル買いがあるから、状況が拮抗、相場が持ち合いにつかまっているわけだ。この閉塞状況を打破するには、10年債利回りスプレッドの低下が止まって反転するか、投機心がさらに加速するかのいずれかが必要かもしれない。

豪日の10年債利回りスプレッドは今週若干反発したが、それにあわせて相場も若干上昇した。このスプレッドだけ見ていればもう少し豪ドル円が下げてもいいのだが、絶対値が大きいことと、投資家の買い意欲が相場を保たせているということだろう。ただ、スプレッドが縮小トレンドにあるうちは相場の上昇も限定的とならざるを得ないか。
(3/4 10:00記)

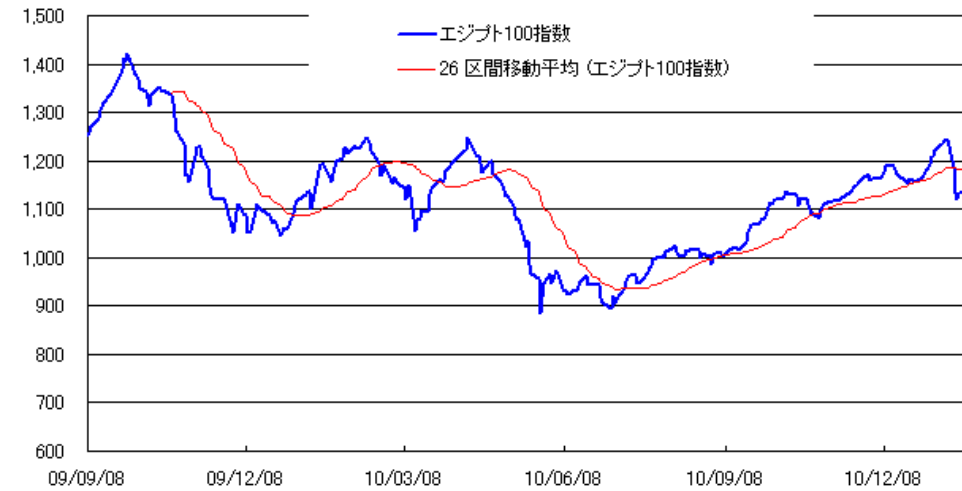
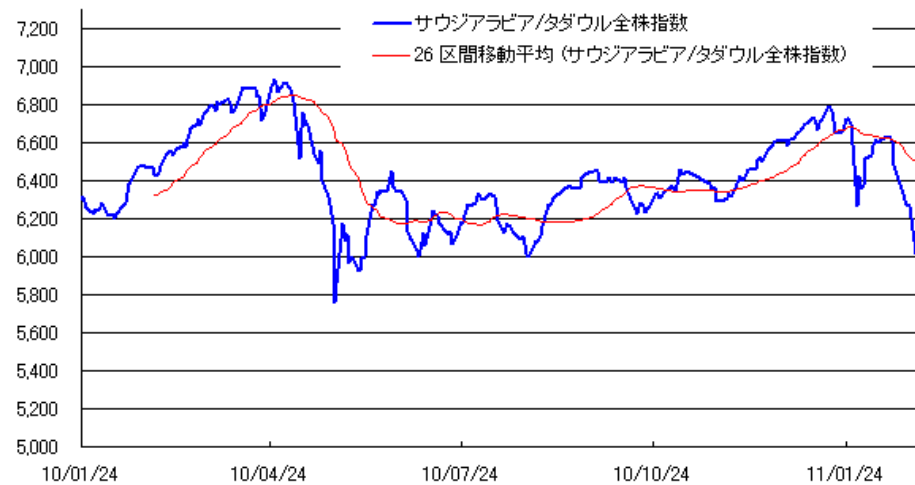
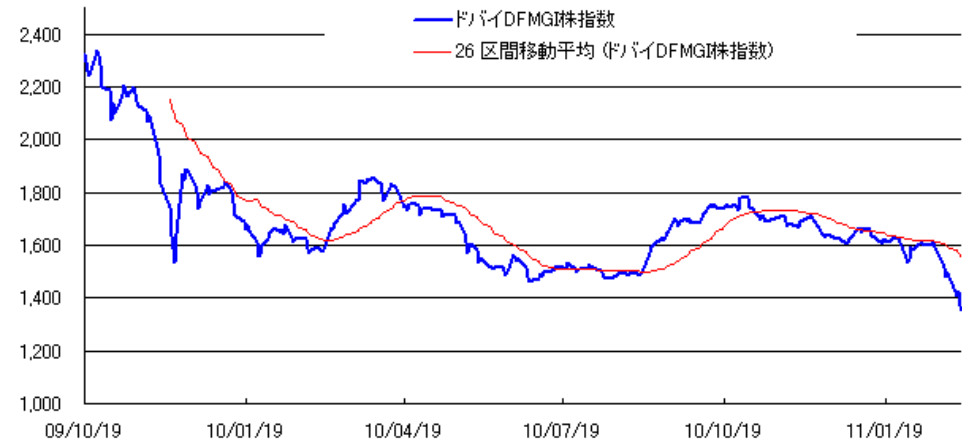
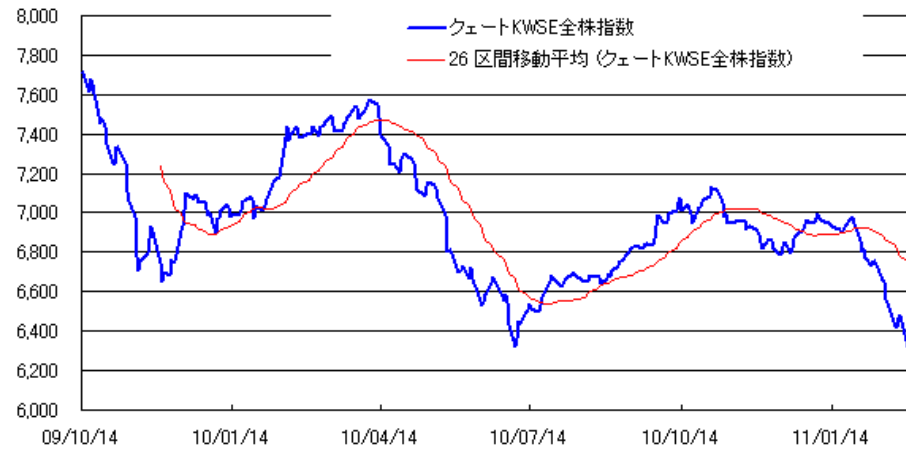
PIGSの10年債動向 イタリアで急落、要注意状況に



チュニジアから始まった北アフリカの騒乱は、エジプトのムバラク独裁政権崩壊、リビアの内戦化と深刻化しているが、地中海を挟み、リビア等のオイルマネーもかなり入り込んでいるイタリアでは10年債が急落しており、重債務国としてのイタリアの負荷が拡大している。特に今週の下落は昨年末からの水準を底抜けってきており警戒信号が点る。ギリシャも下落基調が続いている。ポルトガルも小康状態ではあるが、一月後半からの下落で一段安した状況のまま回復できていない。

ECBはインフレ抑制のために4月にも0.25%乗り上げを実施する可能性があるとして3日のECB理事会後のトリシェ総裁会見で示唆されたが、景気回復の道半ばでの利上げは、特に中東情勢不安と原油高騰という爆弾を抱える状況においては、投資マネーを逆流させ、特に弱い環であるPIGSを直撃しかねない。すなわち、欧州信用不安の再燃もありうる。(3/4 10:00記)

サウジ、クェート、ドバイの株暴落について



サウジアラビアの株価が暴落している。3月11日と20日に大規模デモがネット上で呼びかけられているという。クェートもドバイも同様に暴落している。これを単に民主化の問題で捉えても相場にとってはしょうがないが、思い出すべきはドバイショックである。バブル絶頂の中で、バベルの塔の如きドバイタワーを建設し、この世の楽園とまで言われたドバイもバブル崩壊で投資マネーが逆流して大騒ぎになったことは記憶に新しい。これら産油国の株が暴落することは、世界中に投資資金をばら撒いてきたオイルマネーの懐が深刻に痛んでいることを示す。

チュニジアからエジプトに波及した民衆蜂起はリビアで内戦化しているが、イランにおいてもデモ隊が武力鎮圧されたり、バーレーンやイエメン、オマーンでも動きがある。リビアは元々が欧米帝国主義から革命で独立した国家であり、チュニジアやエジプトとは違い、本来はカダフィ大佐の革命政権であるから、そう簡単には倒れないだろうと思われる。問題はより長期化するだろう。また、生活水準そのものよりも、人間としての主体性なり、自由な存在性こそが、このような民衆蜂起の原動力でもある。それゆえ、圧制、独裁、アナクロな王国は、揃って崩壊する可能性がある。それは、チャウセスクのルーマニアが崩壊し、旧ソ連が崩壊したのと同じかそれ以上の歴史的な意味を持つかもしれないし、それを封じ込めるだけの力が、今の欧米帝国主義にはない、というのが問題を深刻化させてゆく(3/4 14:00記)

日経平均 日足分析 チャンネルから落ちなかった、ならば

日経平均株価 日足 期間09/07/15~11/03/04(400)高11408.17(10/04/05)安8796.45(10/09/01)

11/03/04 始10730.91 高10788.43 安10664.37 終10693.66 出148327

9日 終値単純_MA=10597.05 26日 終値単純_MA=10593.31 52日 終値単純_MA=10498.85

世界的なリスク回避の動きで2月17日高値10891円から失速した日経平均だが、2月24日安値で10428円まで下落したものの、52日移動平均及び、昨年11月底と今年1月31日安値を結んだ現状の上昇チャンネル支持線に絡んだが転落を回避、1日へ3連騰、反落してまた上昇し、僅かに戻り高値を更新している。

昨年9月底を頭、7月と11月を両肩とする逆三尊構成からは戻り目処10705円、中勢的には昨年4月天井を頭、1昨年8月高値を左肩とした三尊の右肩が戻りの限界、という見方で来た。3月中に2月17日高値を上抜けずに11月2日以降の上昇チャンネル及び52日移動平均から転落すれば、この見通しの範囲と考える。しかし、あくまでも世界、特に欧米の株高が終わらなければ、他力本願の日経平均が単独で上昇していくものでも下落するものでもない。その欧米株がまだ崩れない以上、内外で2月高値を更新した場合のことも考えておく必要がある。

2月17日高値を更新する場合、3ヶ月から4ヶ月周期の天井サイクルから見て、次の天井期は4月から5月。上値目標は昨年4月天井へのイッテコイということになる。過剰流動性バブルはいつ崩壊しても不思議ない。リビア内戦がその引き金になりそうだったが、現状はやり過ごしている。欧州信用不安再燃、ECBの利上げ、米経済指標の失望、米金融機関破綻リスク再燃、中東騒乱のサウジへの波及、トリガーになりそうなのはいくつもあるし、いつ、破裂するかわからないが、破裂しなければ楽観論の株高進行曲が続く。上昇チャンネルから転落したら内外ともに奈落であろう。それが見えるまでは「バブルに逆張りなし」モードのままかもしれない。

RCIの26日線は2月後半の下げで反転下落中。2月高値更新に失敗してこの26日線がさらに下落するのがテクニカルチャートとしては理想だが、2月高値を上抜けば、同26日線も反転上昇で高原に戻る。
(3/4 16:15記)

